



この一冊

Vol. 101



会員 石井 逸郎 (49期) ●Ichiro Ishii

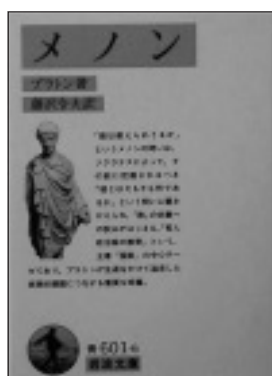
私たち弁護士の仕事には、各種法概念についてその定義や射程範囲を法の趣旨にさかのぼって解釈し、それを適用するという作業があります。ある概念について説得的で普遍的な定義をするという作業は、説得の論理を構築する基礎ですが、その作業の面白さを味わえる教材として僕が薦めたいのは、プラトンの『メノン』です。

はるか古代プラトンは、師匠ソクラテスの対話シリーズをいくつも残しているわけですが、これもその1つ、メノンという若者とソクラテスの対話です。法科大学院が始まる時、これからは「ソクラテス・メソッド」によって法的技術等を若者たちに教えるんだという議論があったのですが、僕はこの『メノン』こそがその「ソクラテス・メソッド」の基本的なあり様を示していると思っています。

対話は、メノンの、人間の「徳」とは誰かが教えることができるものなのか、それとも訓練によって身に付ける以外にないのか？という問いから始まります。それに対しソクラテスは、まず「徳」の本質的な定義を確定しようと言います。

定義の論理性の面白さを示す一例として、ソクラテスは「形」の定義の話をして

『メノン』 プラトン 藤沢令夫訳



岩波文庫
583円(税込)

箱や球、いろいろな形があるけれど、「形」とは何か。2人がああでもないこうでもないという対話を重ねた後、ソクラテスは、地上空間がそこで限られるもの、立体の限界が「形」だと定義するのですが、これはなかなか見事な数学的定義です。

ですが肝心の「徳」の定義が定まらない2人。ソクラテスは「徳」の本質を2人で考察し、探求しようと呼びかけますが、逆にメノンは、探求の対象を知らないのにどうして探求することができるのか？と問います（これが、後に「メノンのパラドックス」とも呼ばれる理屈です）。これに対しソクラテスは、現存

知識を土台に、考察がさらに深まるプロセスの一例を示そうとします。メノンの奴隷を生徒にみだて、砂浜に、正方形ABCDを描き、この正方形の2倍の正方形を描いてごらん？と問いかけるのです。するとこの奴隷の子どもは、各辺を2倍にしたらどうか？とその正方形を描いてみます。するとその面積は元の正方形4つ分になることが分かり、次は、その2倍にした辺と元の辺のちょうど中間の長さ（つまり1.5倍）を辺とする正方形にすると、やはり2倍よりやや大きい面積（2.25倍）となる等の試行錯誤の後、ソクラテスはおもむろに、元の正方形を田の形に4つ並べて、その各正方形の各対角線を辺にした正方形を示すことによって、2倍の正方形の作り方を気づかせたのです。これは、ピタゴラスの定理、正方形の対角線は、辺の $\sqrt{2}$ 倍になるという新たな知識をこの子どもにもたらしめました。

さて、現政府は、戦後初めて「道徳」を教科化しますが、この後、ソクラテスは「徳」の本質をどう考察し、教えられるものとしたのでしょうか。時空を超えたソクラテスらの論理的哲学的思考のプロセス、「ソクラテス・メソッド」の追体験は、有意義です。

